【ポスター発表】

看取り期の死生観に関する研究動向と今後の課題

○　大妻女子大学　　村田　真弓（8004）

キーワード：死生観、看取り期、研究動向

１．研 究 目 的

今日、看取りの場は多様化する傾向にあり、様々な専門職が看取りに携わっている現状がある。このため、対人援助職者にとっては各々の援助技術を磨くと同時に死生観の涵養が必要であると考える。また、看取り期にある利用者のもつ全人的ニーズに応えるためには多職種による連携・協働が必要不可欠となっている。これに伴い、研究領域においても学際的なアプローチが期待される。本研究の目的は、看取りの段階と死生観に関連するこれまでの研究について、論文検索によって得られた資料を分析し、これまでの研究動向と今後の研究課題を明らかにすることである。

２．研究の視点および方法

死生観は歴史や文化、生活習慣等に影響されると考えられるため本研究では国内文献を対象とし、日本の論文検索システムとして広く活用されている国立情報学研究所学術情報ナビゲータ CiNii Articles を用いて資料収集を行った。また、看取りの段階を示す用語については、「ターミナルケア」「終末期」「緩和ケア」の３つによって表現される場合が多くみられるが、これらは現状として明確に区別して使用されてはいない。そのため本研究においては、これらを「看取りの段階」を示す同義語として位置づけ、検索語はこれら３語と「死生観」のＡＮＤ検索によって抽出した。

３．倫理的配慮

本研究は収集した資料文献から考察を試みるものであるが、日本社会福祉学会の「研究倫理指針」に基づき文献引用においては原文を適正に引用するものとする。

４．研 究 結 果

検索の結果、「ターミナルケアと死生観」については 39 件（1989 年～2012 年）、「終末期と死生観」は 67 件（1992 年～2012 年）、「緩和ケアと死生観」は 29 件（2002 年～2012 年）、のべ 135 件が抽出された。このうち重複資料を除外した結果、分析対象資料は 120 件となった。全体的な研究の動向をつかむため本研究の論文検索により得られたデータを年次別に見てみると初発は 1989 年であり、これまでに最も研究結果の発表が多かったのは 2010 年の 23 本であった。その他研究概要の分析結果については、表１のようになった。

表１　研究の概要

項目	内訳	数	%
1.筆者の所属領域	看護学	67	55.8
	医学	19	15.8
	介護福祉学	18	15
	社会福祉学	5	4.1
	心理学	2	1.7
	宗教学	2	1.7
	文化人類学	2	1.7
	社会学	1	0.8
	哲学	1	0.8
	薬学	1	0.8
	作業療法学	1	0.8
	理学療法学	1	0.8
2.研究対象	学生	52	42.6
	現任医療従事者	34	27.9
	一般市民	26	21.3
	患者・患者家族	9	7.4
	諸外国	1	0.8
3.研究目的	医療環境の整備・充実	62	51.7
	教育	57	47.5
	死生観の国際比較	1	0.8
4.掲載誌	学会・研究会誌	75	62.5
	紀要	43	35.8
	抄録集	1	0.8
	一般雑誌	1	0.8

５．考 察

これまでの研究動向からは看護学領域では看取り期の死生観に関する研究が活発に行われているものの、他の学問領域では研究が活発に進んでいるとはいえない。また、研究対象は学生を対象とした調査がもっとも多く、教育現場における死生観の涵養を目的とした研究が多くみられた。今回得られた資料では、これまで学際的な研究成果として発表されているものはみられなかった。今後の課題としては個々の領域における「死生観」に関する研究がより活発に進められること、引き続き死生観の涵養に寄与する研究が為され長期的な視点で現場に貢献されること、多職種連携の観点からは学際的な研究が為されることが必要であると考える。